

氏名	脇 本 清 二		
学位の種類	医 学 博 士		
学位授与番号	甲 第 216 号		
学位授与の日付	昭和42年 3 月31日		
学位授与の要件	医学研究科外科系産科婦人科学専攻 (学位規則第 5 条第 1 項該当)		
学位論文題目	子宮頸癌に於ける術前照射法の研究		
論文審査委員	教授 橋 本 清	教授 小 川 勝 士	教授 大 村 順 一

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

岡大産婦人科にて岡林式広汎手術を受けた子宮頸癌患者 124 名を研究の対象として、子宮頸癌術前照射法（照射量テレコバルト 2,000 R, 3,000 R）の検討を行なった。主な検索内容は術前照射による全身への影響、原発巣への効果、手術及び術後に関する問題、転移リンパ節への効果、及び一年予後等である。その結果、特に問題となるのは次の諸点であった。

①全身の影響の内では下痢の増加、白血球（特にリンパ球）の減少及び血清総蛋白量の減少が認められたが、この為に手術不能になった症例はなかった。②原発巣の所見は改善され、組織学的にもかなりの効果を認めた。③手術操作は幾分困難となったが、手術時間及び出血量に変化を認めず、重症術後合併症の増加も認めなかった。④転移リンパ節には組織学的に特に 3,000 R 照射例で可成りの効果を認めたが、リンパ節転移率の減少は認められなかった。⑤予後に及ぼす影響については一年内再発及び癌死率を非術前照射群 179 例と比較し、好転の傾向がみられた。これらの結果に加え、術前照射の意義、組織学的あるいは臨床的效果よりみた照射線量の問題、大量照射による副作用及び術後合併症、岡大術後分類案の検討、更に初期癌（特にⅠ期癌）に於ける再発の実態などにつき、種々考案を加えた。その結果、子宮頸癌における術前照射法としては比較的少量線量（2,000 R～3,000 R）を全例に照射する方法が適当ではないかという結論を得た。

日本産科婦人科学会雑誌 第19巻 第7号（昭和42年7月1日掲載予定）

論文審査の結果の要旨

本研究は根治手術の際癌細胞撒布による転移再発予防の目的で術前にCo⁶⁰遠隔照射2,000～3,000 R照射の直接影響を検討した。

よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。